

稲 に 祈 る

吉植庄亮



吉植庄亮著

稲に祈る

愛宕書房版

稻に祈る



定價
特別行爲稅相當額
合計

貳圓貳拾錢
貳圓四拾錢

昭和十九年四月三日印刷
昭和十九年四月二十日發行

(全版三千部)

著者

吉植庄亮よしうゑ しょう

發行者

山崎泰雄やまざき たいゆう

印刷者

谷本正やまもと せい

印刷所

愛宕印刷株式會社

製本所

至誠堂製本所

配給元

日本出版配給株式會社

出版會承認四一〇〇七一號

發行所

愛宕書房

出版會會員番號一〇二〇五六

東京都芝區新橋七丁目十二

東京都芝區愛宕町二丁目十四

東京都芝區新橋田町十九

目次

稲に祈る

勅題を拜す	二
稲に祈る	一四
農民	二三
日本農村女人像	三七
村の子供のために	四八
お百姓の子供達と衣物	五四
私は田にはいる	五九
豊稔りに歌ふ	六三

農村と映畫……………七

農村文化のことなど……………七一

百姓道

皇后陛下を村道に拜す……………三八

國生み……………六

百姓道……………九

土まぶれの歡び……………五

朝を持つ人々……………一〇

土……………一四

雜草恩恵……………一六

稻孫……………一八

身邊雜筆

田園早春……………二三

田植過ぎ……………二八

葦……………二三

馬鹿筈……………二六

勤勞の歌……………二六

國民勤勞の短歌……………二六

大陸炎暑行……………一四

臺灣生れの日本少女……………一四

臺灣土產……………一五

兩院文化會……………一五

千島紀行

戦ひぬく力の泉……………	一六〇
一握の鹽……………	一六六
未だ生れざる子の親に要求するもの……………	一七二
病院と選舉……………	一七八
千島紀行……………	一八六
北千島の夏……………	二二八
あとがき……………	二三六

稻

に

祈

る

勅題を拜す

一

稻孫田^{ひつち}を刈る子ら多み十二月八日の日和たぐひまれなる

十二月八日の晝過ぎ、停車場から自宅までの二十分行程の道を歩いてゐた時、この歌が私に出来た。

肇國以來の國難へ面もふらず突入した、そしてうつくつ、隠忍から、撃破清明に百八十度の轉回をなさしめた十二月八日が再びめぐり來り、しかも一天隈もなく、晴れて雲なく、風なく、をりふし渡る飛行機がその青空に澄み入つて、ただ響を私達に残すばかりである。

天地をつらぬく道にこぞりたる十二月八日清らに來る

何といふ清らかに、寂かなる天地であり、また何と護り果たされた御國の姿であらうと、私の

心は感激にみちつつ歩るいてゐた。

麦蒔が終り、田の收穫が終つた野の面には、いつもの年ならば、もう人影も無い季節であるのに、今日の田の面には啄む鳥のごとく、前屈みの人影がそこにもここにもいそしみ働いてゐる。皆一生懸命になつて稻孫穗を刈つてゐるのである。

稻孫穗といふのは、秋の收穫を終つた田の刈株からむらがり生ふる二番穗の事で、一番早稻の稻孫穗はいつもの年でも實がはいりますが、今年の秋おそくまで續いた豐年型天候は、豫想外の稻孫穗稔りを見せ、牛か馬を放つて食はせる代りに、かくは稻孫穗刈りの珍しい風景を現出したのである。

今年や豐年穗に穗が咲いて、といふ民謡のとほりに、今年の稻は枝を打つて、一本の幹かみから二本の穗が稔つたものさへさらにあつた。その上に、豐年の瑞象は、日本の國の一部分であつたとしても、このお芽出度い稻孫穗刈り風景にまで進展した。

この秋に私達は、新年の宮中御歌會に、

「農村新年」の御題仰出になられた事を新聞に承つたのである。このたぐひ稀なる豐稔は、もとより豐葦原瑞穗の國を守らす神々の、大きな思召しの副へる事ながら、全國農民の増産に勢ふ、涙の出るやうな精進努力のおかげであつただけに、この御題を拜するに當つて、農民達の感激一

しほ切なるものある事を私は思ふ。

四

豊あし原瑞穂の國に

天つ日の光のしづく

白玉の米をつちかふ

大みたから田作われは

天皇の朝夕のみ餉^けの

兵^{つはもの}のいくさの糧^けの

白玉の米に仕へて

大みたから田作われは

あかつきの月をいただき

夕鳥かへれるあとを

ひたすらに土にいそしむ

大みたから田作われは

土こそはゆたかなる母

その母のふところにしも

土の子のあけくれ清に

大みたから田作われは

この貧しい詩は、農民のはしくれにゐる私が、農民の心を、農民道と言つたものを、十年の私の體驗を基として歌ひ上げたものである。私はこの中で、農民の勤勞にまで、また農民のほこりにまで、米への愛敬の心にも歌ひ及んで居り、特にここでは、天つ日の光のしづく白玉の米と言ふ一句で、十分農民の米への心持を表現して居る積りである。

神さまが與へてくれた、私達百姓の穫り入るる米に對して、私達の日の光のしづく白玉の米と眞實思ふ。こんな美しい、淨らかな米を、いつよりか日本では、玄^{くろ}き米と呼びならはして、糠をとり去つた不健康な米を、白米と呼び賞で愛しみ來つたが、その誤りも今日に正されて、光の雪白玉の米を、そのまま國民に食らはしめようとする、國をあげての機運にむかつて來たことは、われわれ農民を心から喜ばしめる。私はまたこの詩で、天皇のお召しあがりになられる御飯、

兵隊さん達の戦陣糧食、その太宗をなすものは白玉の米であり、その米に仕へて神代この方、いそしみ來つた農民の心を昂揚して居る。

農村は純粹日本思想の根源、産業勢力の給源、國軍の基本といつたいろいろの點から、あらゆる産業面からの手が、農村に限りなく伸ばされてゐるに關らず、政府が、農村人口四割保有を國策として定めたこと、皇國農村確立の新政策としたことが、農民の眞の姿を驗に描く時はつきり合點される。そしてこれらの事が今日政治せられるに至つた事情を考へる前に、私の貧しいこの詩を一度二度讀んで頂くことに依つて、それらのことがらが尙はつきりすることと思ふ。

私は勅題を拜しつこの點を謹み思つてゐる。

三

大君の早苗植ゑたまふけふの日のみ田の泥らの光面おもはゆ
天皇ぞ田に降り立たす白玉の米とる道のかくもたふとく

この二つの歌は昨年六月十四日、

天皇陛下が田に御自ら降り立ち、御田植を遊ばされたとの趣を、新聞記事に拜した時、忝く私に

生まれた歌である。現つ神でおはします 天皇が、お自ら苗を御取りになり、泥かきわけてお田植を遊ばしますのである。苗も感激に打ちそよぎ、泥も光榮に面を照り輝かしたことであらう、その苗を、泥を、私は羨望しつこの歌を歌つてゐる。

加茂真淵の歌に、

大御田のみなわも泥もかきたれてとるや早苗は我が君のため

といふ一首があるが、これは大君に、み國にささぐる米を、ひたむきに培ふ農民を讃へて詠んでゐる。豐葦原瑞穂の國の本體が 米作る民と之に感激しつある民と——この歌ではつきりわかる心地がするが、そのみなわも泥もかきたれて田を植うるは、田作りの伴のみではない、現つ神大君も苗を執り植ゑさせ給ふのである。神國日本、瑞穂の國日本、戦ひつつある日本の尊い姿が、ありがたく、忝く拜され、天恩のあつきに愈々感泣せられる次第である。

今上陛下に於かせられては、昭和二年の六月に、御田植を御手づから遊ばされてからかくる事なく、年年に御田植をせさせ給ふと漏れ承る。今こそ國民は米作りを農民のみに任せ置くべきでない、國民總力で之は戦ひ取るべきであり、米は尊ぶべく、敬ふべく、一粒とても粗末にしてはならないといふ意識に徹しては來たが、この限りなき大御心の前に尙ひたすらに恐み、ひれ伏さ

なければならぬ。

戰に勝つと共に、勝利に向つて安んじて戰ふ爲には、食糧の確保といふ事が一切に先行する。食糧増産が、一國の至上命令として、今日ほど力強く國民の心に打ちひびく事はない。

その時に私達は、「農村新年」の勅題を拜したのである。この勅題を讀み、三十一文字を詠進し奉るだけで、私達の任務は果されたとは言はれ無い。

國を擧つて食糧増産を必ず遂げます、といふ國民の盟がまだ残されてゐる、その實行と共に。

四

新年御歌會の「農村新年」の勅題を拜して、政治家として私が直ちに想ひ到つたことは、戰時食糧の完全確保といふ事である。そして大御心の遠くゆきわたらせらるる尊さに、只々感激し、ひれ伏した。

では日本の戰時食糧はどうなつてゐるか、以下少しく言はして頂き度い。

言ふまでも無く、戰爭は、長期戰の一路を邁進せるその性格と、戰場が大體海上に限られて來た關係とから、これからの戰爭は生産戰が主體となる事は否み難い。わけて亞米利加が一九四四年の大反攻を聲明し、飛行機六萬臺、船舶八百萬噸年産を呼號し、この物の量に物を言はせて其

目的を達しようとしてゐる作戰に對して、日本の生産陣營があまりにも遙か下位に甘んずる事は許されない。勿論日本魂でわれらは行く。然し敵の百に對して一、五十に對して一であつてはならない。

その生産戰が一つの正面的戰爭であることを、私達は先づ覺悟せねばならないが、生産戰の中でも、食糧生産戰こそはその首座を占むる。

前線と銃後たるを問はず、戰線參加者を養ふものは食糧であり、また一般國民を養ふものも食糧である。この食糧が缺乏して來た爲に、戰に勝ちつつ遂に軍門に降つた、第一次歐洲大戰の獨逸は、貴い歴史を私達に遺してゐる。産業戰士餓うる時に軍は生産減退を來し、國民餓うる時士氣は沮喪し、敵の謀略が其虛に跳梁し、これが直に前線に逆作用をする。獨逸は正にその苦き體驗をなめて居ればこそ、第一次大戰以來、農業政策に政治の力を集め、戰時食糧對策に萬全を期してゐる。

ところで、我國はありがたい事に、昭和十二年支那事變勃發以來、平均年六千四百萬石の米の收穫を擧げてゐる。之を戰爭前六ヶ年の平均收穫量に比べると、一年三百萬石の收穫増となつてゐる。こんな事は、世界の何處を探しても例しのある事でなく、全く以て豐葦原瑞穂の國だけの事がある。然し、内地はこの通りであるが、外地の朝鮮、臺灣が時折不作の上に、異常の消費増

を來し、日本全體としては近年年ごとに多額の外米を輸入して、米のバランスを取つて來たのである。

が、もうそのやうな事は許されない。假りに南方から一千萬石の米を持つて來るとすれば、百五十萬噸の船腹が必要となり、この船を滿洲、北支、中支よりの物資輸送に當てると、六倍の能率が上ることになるから、九百萬噸の働をする事になる。米を南方から持つて來る代りに、南方のゴム、錫、石油、砂糖を、支那、滿洲の鐵、石炭、鹽其他の資材を持つて來れば、軍艦、船舶、飛行機、兵器其他一般物資の製造に、日本は十分の拍車をかける事が出来る。食糧に一つの例を取ると、石油が少し餘計に來ただけでも、この三四年出漁見合せの爲めに、うんと増殖してゐる遠洋漁族の、思ふ存分の捕獲が出來、動物質蛋白の補給によつて、米の十分なる充填が出来ることになる。

愈々生産戰が對米英戰の本體だとなつた時、これらの事實の前に眼を塞いで、日本の戰時食糧を安易なる外米依存政策に放つて置くわけに行かない。どうしても此處に、日本人全部を日本米によつて養ふ新政策が執られねばならない。

では日本人全部を日本米によつて養ふことが果して出来るか。私は勇敢にそれは出来るかと答へる。では如何したら出来るか。生産部面に於て戰後六年の平均收穫量六千四百萬石を確保し、消